

書 評 Book Review

生物学から文化へ (上, 中, 下巻)

Prof. Jacques Ruffie (College de France) 著

みすず書房 (上巻, 1984年9月刊, 2,800円)

4部にわけられた「生物学から文化へ」の大作は、彼のこれまでの研究生活に基づいた志向をまとめたもので、今回とりあえず出版される第一分冊は、その第1部であり、リュフィエ教授の専門とする血液型学について、その技術というよりは、これら多型形質の研究が、どのような理論を展開し、人類の進化を説明できるかを解説したもので、人類遺伝学者になじみの深い生物進化の問題をわかりやすく解説した絶好の名著であるといえよう。

彼は、フランス科学アカデミー総裁のベルナル教授とともに、1966年と1971年に「地理血液学」と題する上下2巻の名著を刊行し、われわれに新しい概念として、遺伝と環境要因のかかわりあいの重要性を指摘して、以来かれこれ15年近い歳月が流れている。

今回の序文でも、そして彼の福井での「生命科学の進歩と人類の未来」と題した講演の中でも強調しているように、今や人類は有史以来未曾有の危機に直面しているといえよう。ダーウィンの1859年に出版された「種の起源」以来、モノーの「偶然と必然」が世に出るまで、ここ一世紀の間に進化について書かれた書籍の多くは、淘汰の意義について神聖侵すべからざるドグマとして君臨し、かろうじて木村の淘汰中立論が数学者の立場から唱えられてきたにすぎなかった。また、一方、知識の細分化につれて、それぞれの専門領域の中で理解が深められたものの、進化の過程は極めて複雑であり、生物学と社会文化の間の総合化の橋渡しを試みたヴァンデルに迫ろうとして、彼はこの書を企画したわけである。

このように、第1部は生命の起源、生物の多様性そして進化のメカニズムについて総合化を試みている。第2部は来春早々に刊行される予定で、人類の出現とヒトの特異性を、単に生物学のみでなく、社会学的にも分析しようとしており、ヒト以外の霊長類についても言及して、人類集団の危機についても論述している。第3部・第4部合わせて、来夏までに完結される予定であるが、ここでは現在の人類の生物学的構造と社会学的文化的要因について論述し、ことに生物学的には民族というものは存在するものでなく、民族にまつわる神話が今なお根深く生き残っている原因としての民族主義、いまわしいナチの理念をはじめとする人種差別の問題についても、鋭い批判の目を向けている。

このような論点に立脚して、未来学について論及し、総合の理念に出発して進化の様式と生物のさまざまな単位、個体や集団の構造を詳述し、現在の人類集団のもつ危機の本質とそれを回避しようとする努力をどのようにして明らかにすることができるかを論じている。すなわち、人間社会の構成要素ことにマイノリティグループ、つまり外国人、青少年、女性、老人そして心身障害者についても、今日われわれの患っている社会病を推論し、総合の構造単位である家族・学校・教会そして国家がこれに対応していかにあるべきかを論述している。こうした考えは、彼が「科学の進歩と人類社会」の中曽根会議でいみじくも述べた理念であり、生命科学と人間社会の位置づけと進化の過程を総合的に

みることによって成しえたものであるといえよう。

最近、急速に進展をとげてきたバイオテクノロジーによって、人間社会の中で、たとえば、将来糖尿病になるとわかっている胎児に対してインスリンを作る遺伝子を組み込むようなことがあっても、このような遺伝子操作によって、均一化した人間を作ってはならないし、人類の生存、進歩のためには、さまざまな多様性が必要であると述べている。

現代の科学者は、その参加する社会の中であって、自己の研究方向を流れる歴史の中で考えてゆくべきことを述べて、本書を結んでいる。このような生物倫理学が日本にも定着する日の一日も早からんことを願って、拙文を終えたい。

最後にこの 586 頁にも 及ぶやや難解ともいえる名著をわかりやすく翻訳して下さった河辺俊雄、石田貴文、佐野敏行 (I)、芹沢玖美 (II)、河辺俊雄、太田垣みどり、浜名俊美 (III) の諸君諸嬢、およびこの刊行を企画し、本訳書の世に出る直前に不幸にして持病のために世を去られたみず書房編集室の故松井卷之助氏に絶大な拍手を送りたい。

(福井医科大学 藤木典生)